思い出す、とき。
伊澄　葵

思い出す、とき。

http://p.booklog.jp/book/37417

著者：伊澄　葵
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/nshkn/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/37417

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/37417

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ

物思う朝

明日は晴れるよ。

その言葉を何回聞いただろう。
カーテンをあけて薄水色の空と聞こえてくる始発の音を聞きながら、昨日の電話を反芻する。

寝るときの言葉はいつもそう。
おやすみじゃなくて、天気予報ならぬ天気予言。
また勝手なことを言ってる。
そう抗議すると決まって言われる言葉。

「だって俺さ、晴れ男じゃん？」

それは旅行とかの時に役立つものじゃないのかと思っていたが、彼に限っては例外らしく本当に晴れる。
もしかして絶対晴れる日を狙ってかけてくるのかとも思うが、多忙な彼がそこまで気を回してるとは思えない。
そんな訳で電話の最後の天気予言を聞くと、明日のおひさまを考えてちょっとだけわくわくして寝られる。

もしかして、雨が苦手な私のことを考えてくれてるのかな。
そう思っても聞きにくいのは照れくさいのもあるし、なんだかおこがましい気がするのもある。
何よりも、違った場合にこの少し心がきゅんとする、 このいつもの言葉が聞けなくなってしまうのが嫌なのが大きい。
せっかくの天気なのについついもやもやと考え事をしてしまつた自分に苦笑しつつ、私はようやくベッドから脱出する。

「頭の中、こればっか。」

だって、気にかけてほしいんだもん。
とキャラに合わない独り言を心の中でつぶやく。
女の子らしいのは私らしくない。

でも、自分で言うのもなんだが、三年ぶりの恋に戸惑っているのは何よりも自分自身だったりする。
しょうがないじゃん、好きなんだし。
多分友人が聞いたら三度くらい聞き返されそうな台詞も自然とつぶやいた自分に本日二回目の苦笑したのは言うまでもない。

寝起きの昼

何寝てんの。

声と手にペコっと頭をはたかれて、もぞもぞと動き出す。
眠気の残る頭をふりながら、少しだけ抗議する。

「ここ食堂…しかも昼休み…」
「だからでしょ。」

その一言に続いて、昼の混んでる時間にこんなとこで寝てスペースをとってることを叱られる。
言っていることが間違ってないから反論出来ない。

で、なんでそんなクマ作って昼寝する羽目になってる訳？
そう言いながら先輩が目の前の席に座り、サンドイッチを頬張りはじめる。

「あ…ディーン&デルーカのサンド！オシャレですねー。」
「…言いたくない訳ね。」

そりゃあ言いたくない。
仕事の締め切りとか報告書とかで大変ならまだ相談なり愚痴なり言えるが、完璧にプライベートな悩みだ。
只でさえ仕事でおんぶにだっこになってるのに、これ以上迷惑なんて……

そうグルグルと頭の中で考えてると、突然眉間に指の感触がして、びっくりして視線を上げる。

「ほら、眉間に皺まで寄ってる。そんな顔ばっかしてるとシワシワのおばあちゃんとかあっという間だからな。」
「そ、そんな事ないですよ！ひどいですよ、もう。」
まさか顔を触られると思わなくて、思わず顔が赤くなったのを隠すために、横を向いて拗ねているふりをする。

そんな私をじーっと見て、ぷっと突然先輩は吹き出す。

「今度は何ですか…？」
「おまえさ……顔に寝た痕ついてる！」

今度こそ本当に顔がぶわっと真っ赤になる。

「見て見ぬふりしてくださいよ～」
恥ずかしさの往復ビンタに半泣きの声で抗議する私に先輩はケタケタ笑いながらこう返した。

「いやぁ、いい昼休みになったわ。ま、笑ったお詫びに夕飯どっか行こうぜ。メールするわ。」

そう言うと、私より後に来たにも関わらず早々に昼休みを先輩は切り上げてしまった。

本当は真っ赤な顔のまま食堂に居られなくなったというのが大きな理由だが、
とりあえず、顔についている痕を確認しておく風を装って同じくそそくさと立ち上がった。

「余計に気使わせたかな……」

午後の操作音

もう秋の空だね。

そんなメールに思わず研究室の窓から外を覗き見る。
確かに鰯雲がぷかぷかと空を泳いでいる。

サンマの季節だね。

そう返した私のメールに速攻で返信が来たことをパソコンがピロンと言う音で教えてくれた。

さすが色気より食い気。

ピロンにときめいた私の心が一気にガクッとこける。

そんなの昔からじゃん。

そう返信をしようとした矢先にパソコンが再度ピロンと教えてくれる。

というわけだから、夕飯にラーメン屋どう？
学食飽きたんだよ。

なんだか、秋の空にサンマと返すことを見透かされているかのような流れにちょっと複雑な気持ちを覚えつつ、今度こそ返信する。

いいよー。７時頃には実験終わるし。
エントランス辺りで待ち合わせね　：）

ちょっとダレていた実験への気持ちをぐいっと引き締める。
研究室という男社会で暮らしてはいるものの、さすがに女子一人でラーメン屋に行けるほど強くはない。
同期がいる今日はチャンス、かつ最近冷えてきた所だからちょうどラーメンの気分だったのだ。
色気より食い気だろうが、食い気しかなかろうが関係ない。

そう考えながら実験を進めていると、隣の実験卓の後輩が話しかけてきた。

「先輩、なんかニヤけてますけど…もしかしてデートの約束ですか！？」

「うん、ラーメンとね。」

目の覚める夕方

ゴメン、待たせた？

少し小走りで来た先輩に思いっきり首を振って否定の返事をする。
お昼に私の心配をしながら爆笑と共に去っていった先輩は本当に律儀に夕飯のメールをくれた。
そして、それが今、である。

「お昼にディーン&デルーカ食べちゃうオシャレな先輩のオススメだなんて、ハードルかなり上がってますよー。期待してお腹好かせましたから。」
「午後の仕事寝ないように満腹にしなかった、の間違いだろ？」
「う゛……」

見事に見透かされた返しに言葉を詰まらせる。
何も言えなくなった私を見て苦笑しながら、先輩は立ち止まり指差した。

「というわけで、上げていただいたハードルを超えるかわかんないけど、このお店ね。」

先輩の指差した先はオフィス街ではちょっと珍しい一軒家風の建物だった。
先を行く先輩について中に入ると、スペインの鮮やかな色彩のお皿に囲まれる。
一軒家風であり柔らかいオレンジの明かりが落ち着いた雰囲気を出していて、オシャレではあるが緊張するほどではない、ほどよいレストランである。

「オススメは定番だけどやっぱシーフードパエリア。あとは適当に好きなもん頼もうぜ。」
「あ、スペイン風オムレツは必須でお願いします！」
「後はこのピンチョスだろー……」

ワイワイと好きなものを選び、タパスをつまみながら、まずは今日の仕事に関して話始めた。
若干お昼の件に関して蒸し返されるかなと心配していたので、少し安心して懸案事項などを相談する。

「……と、まぁそんなとこか。後は取引先次第だから話してみないとわかんないな。俺はお前の判断で大体正しいと思うよ。」
「そうですか。それなら良かったです！これで今日は安心してたらふく食べれます（笑）」
「んで、安心してぐっすり寝れます、になりそう？」

さすが先輩、というか、やっぱり来たというところだろうか。

それにしても、そんなに心配されるほど私は眠そうなのだろうか。
昼休みは寝てるにしても、午後の仕事でウトウトしたことは無いと自分では思っているが、まさか気づかぬ内に寝ていたのだろうか・・・・・・

「もー。先輩心配しすぎですよ？……もしかして私気づかぬ内に仕事中寝てますか！？」
「いや、ちゃんと仕事してるけど。最近ちょっと顔色悪いし、痩せただろ？」

なんかあったのかなぁと思って、と先輩は続けるとこっちを覗き込んでくる。
そして畳み掛けるように続ける。

「カワイイ後輩が何かに悩んでるようだったらやっぱり心配なワケ。仕事上の先輩でしかないから言いにくいのかもだけど。」
「いや、先輩のことは本当に頼りにしてますし！……ただ、その。」
「ただ、その？」

全く引き下がる様子のない先輩に、根負けして打ち明けてしまった。

「最近ちょっと社内で付きまとわれてるというか……やめてくれって言ってるのに、しつこい人がいて。お昼休憩も、ぼーっとしてると話しかける隙を与えるから嫌で寝てたんです。」
「はぁ！？なんでそれ早く言わないんだよ！誰だよ、そいつ！」
「それはさすがに……」
「いや、俺には言え。大っぴらにしたくないなら、絶対他言はしないから。」
「むしろそんな迷惑かけられないですって。隙を与えなければそこまで危害ないですし。」

言ってしまったものの、なんとか誤魔化そうとする私に先輩は先回りして一人の名前を挙げる。

「え！？なんで！？」
「お前がトイレに行ったりすると、アイツも必ず席立つし。前にこっそりお前のこと聞かれたことあるからな。」
「そうだったんですか。」

っていうか、先輩私のことチェックしすぎですよ～！
ちょっと話が重いというか恥ずかしさでわざと茶化してグイっとワインを煽る。

「ま、俺もお前のこと見てるし。何より俺以外の奴がお前のこと追ってるのがなんかムカツク。」

い、今の台詞は一体！？と私のワインでぼんやりした頭が悲鳴をあげる。

「半分言ったようなもんだし、この際はっきり言っちゃうけど。」

俺はお前のことただの後輩だと思って気にしてるわけじゃない。
でもちょうど仕事頑張ってる時だし、邪魔したくなくてとりあえず先輩でいようと思ってた。
でも最近アイツからお前のアドレス聞かれたり、付きまとってるの見ててかなりムカついてて。
ただもしお前がアイツといい感じだったりするなら俺には口出し出来ないと思ってたけど、
その頃からお前どんどんやつれてきてるし。

「だから、もし次アイツが言い寄ってきたりしたら俺のこと使ってくれていいから。」
「えっと……使うって？？」
「『先輩から呼び出しくらってる。』でも良いし。彼氏いるってことにしてくれてもいいよ、俺からしたら何の損でもないし（笑）」

あまりの急展開に煽ったワインのアルコールもすっかりどこかへ行ってしまったが、一つ気になる。
これは「告白」でよいのだろうか？

「なんか仕事でもおんぶにだっこなのに、それ以外でも迷惑かけちゃって申し訳ないんですけど……でも、ありがとうございます。」
「本当にちゃんと使えよ？」
「はい。ただ、あの、彼氏いるってことにするだけでいいんですか？私。」
「……と言いますと？」

「告白」であったのなら私も返事をしないといけない、ような気がする。
いや、ような気がするではいけない、頑張れ私、と心の中で叱咤してなんとか口を開く。

「もしお言葉に甘えていいのなら、本当に彼氏がいることに出来たらなぁ……と。」

なんとか捻り出した言葉に小さく先輩が吹き出す。

「ものすごい丁寧な返答をありがとう（笑）」

自分でも何が起こったのか把握できているのか、自信がないのだが。
明日からはアイツから逃げるための大義名分が出来たことと、仕事以外での呼ばれ方が下の名前に変わったということが、今日起こったことの証拠らしい。

急展開を反芻して少しぼぉっとしながら電車に揺られていると携帯のバイブが鳴る。

実は割と恥ずかしがり屋なもんで、今日ちゃんと言えなかったんだよね（笑）

好きだよ。

ものすごい勢いで私が携帯をカバンにしまって、寝たふりをしたのは言うまでもない。
ただ、話しかけられないように寝たふりをしていた時と気持ちが正反対なのだけは付け加えておく。

出かけるための理由

エントランスに着くなり、脳よりも体の方が先に返事をした。

「お前、お腹なりすぎだから！」
「だって実験頑張ったんだからしょうがないじゃん！」

ラーメンへの準備万端なんだからと得意気に言い放つとカウンターでいつものツッコミがくる。

「知ってる知ってる。何よりも食い気だもんなー。」
「ラーメンがお店で待ってるから、急ぐよ！」

もはや言い返す元気もなく、先に玄関をでて歩き始める。
この大学はちょっと田舎にあるせいか学校の周りにあまり食べる所がない。
そのため、ほとんどの食事を学食で済ませるが、さすがに飽きた今日のような日は
同期のバイクに乗っけてもらってちょっと遠くまで食べに行く。

歩いたら20分かかる道もバイクならあっと言う間だ。

「バイクさんきゅ。」
「どいたしまして。」

店長とは馴染みだ。

「いらっしゃい！お、久しぶり！今日はどうする？」
「私チャーシュー麺！」
「俺は大盛りで。」
「あいよ。」

いつもの定位置に座ってラーメンを待っていると、同期がぼそっとつぶやく。

「なぁ、Kの話聞いたか？」
「K……最近聞かないけど、どうかしたの？」

Kは高校時代の私の元カレだが、同期とは中学校が一緒だったため、共通の友達的な中途半端な関係にある。
実際問題、大学1年で振られてしまったので友達と呼んでいいのかわからないが。

「まぁお前あんまし連絡とってなかっただろうし、知らなくて当然なんだけど。一昨日事故って、入院してたんだよ。」
「事故！？大丈夫なの？」

そう質問した所で、店長が二人分のラーメンをカウンターにドンっと置く。

「チャーシューおまけな！しっかり食えよー！」
「「あざっす！」」

いつもしてくれる店長のオマケに声を揃えて返事をすると、さながら競争のように二人でがっつく。
ラーメン屋に来たら伸びないうちに黙々と食べるのが私と同期の常だ。
大盛りにも関わらずいつも私より早く食べ終え、かつ替え玉まで行くのだから、人の事を食い気呼ばわり出来ないのではないか、とこっそり思っているのは内緒である。

「あれ、今日替え玉いいの？」
「あー、割とお腹いっぱいになったかな、今日は。」
「めずらしー。私もご馳走さま！店長美味しかったです！」

店長と少しだけ世間話をしつつ、実験が残っているから、といつもの理由で店を出る。
本当はラーメンを食べて満腹になると眠たくなってしまい、実験が出来たことは無いのだが。

「そいえばさ、Kの事なんだけど。」
「あー……」

ラーメンが来てしまって聞きそびれた質問をしようとすると、なぜだか同期は妙にハギレの悪い返事をする。
が、思い立ったようにこちらを振り返り、妙に真面目な顔でこちらを見る。

「そんなに重傷だったの？」
「落ち着いて聞け。事故は大したことなくて、ぶつかりそうになったのを避けた勢いでコケて、バイクごと地面をすべったくらいで足の骨折程度だった。」
「なんだー。真面目な顔するから心配しちゃったよ。びっくりしたー。」
「ただ、すべっていった先が歩道だった。ちょうど塾の帰りの小学生が通っているのが目に入ったKは、ぶつかった勢いで地面をすべっている中でどうやったのか分からないが、ハンドルを無理やりきって車道に留まった。」

いやな予感がする。
返事ができず、ただ同期の顔を見つめながら頷くのが精一杯だった。

「もし歩道に突っ込んでれば、小学生は怪我をしたかもしれない。だがアイツが車道で留まったお陰で子供は誰も怪我をしなかった。まさか車道でもう一回事故が起こるとは思わなかった。ちょうど通りかかったトラックがアイツの上を通った。」

声が出ない。
ドラマや本を聞いているだけのような気がするのに、涙が止まらない。
涙を拭こうと思うのに、手にも力が入らず、ボロボロと伝い落ちていく。

「俺はちょうどKとコンビニで待ち合わせをしてて、全部目の前で見てた。すぐに車道に転がってたアイツを助けに行けばよかったんだ。でも俺もすくんで動けなかった。二回目に轢かれてからようやくアイツの所に走っていった。運がいいのか悪いのかわかんないけど、即死じゃなかった。」

話している同期の顔も涙でぐしゃぐしゃだった。
それでも一生懸命に話してくれる同期がつらそうでせめて抱きしめてあげたいのに、動けなくてへたりこんでしまう自分が情けなかった。

「アイツ言ったんだ、俺の顔みた瞬間に。『アイツの事はお前に任せた。…なんて俺にいう資格ないか。』Kの人生最後の言葉だぜ。最後に俺に会っておきながら、俺じゃなくてお前の心配だぜ。ひでぇよな。」

涙でぐしゃぐしゃの顔で笑いながら、同期は地面に座り込んでる私に合わせてしゃがんでくれる。

「Kはその後病院に運ばれてしばらく持った。だから、もしかして奇跡の生還とかするんじゃないかと思って、最後の言葉はお前に言うのは待とうって決めてた。」

同期はそっと私を抱きしめて言った。

「今日の昼、Kは死んだ。だから言わなくちゃって思った。アイツはお前のこと振ったことずっと後悔して、お前が結構引きずってたのも知ってて、心配していつもオレにお前の事を聞いてきてた。アイツの最後の気持ち、受け取ってやって。」
「……な、んで。ズルいよ、K。」

絞りだした声は涙でガラガラだった。
私が引きずってるのを知ってて心配してたなら、直接言ってくれればよかったではないか。
そんなこと死んでからわかったって、悲しい気持ちが増すだけだ。
彼が死んでしまったからこそわかった事実なのに、よくわからない八つ当たりをする。

「アイツは居た、オレとアイツが過ごした中学時代にもお前とKの高校時代にも。でも、もういない。でもオレはいる。」

オレはいなくなったりしないから。

急にぽっかり過去に穴があいた寂しさと、抱きしめて受け止めてくれる人がいる温かさ。

そして、話を聞いて泣くだろうことを予測して、研究室に戻らなくていいように、わざわざラーメンに連れ出した同期を「任せる相手」として選んだKに、見る目あるじゃんと心の中でこっそりつぶやいた。

思い出す、とき。

高校時代、毎日学校で会っているのになんであんなに電話できたんだろう？

しかも大概同級生や先生の下らない話ばかりしていた。
親に怒られないように布団を被ってはなしていたっけ、とちょっとだけ懐かしくなる。

「ベッドの上で携帯いじるのってその頃の癖なのかな。」

独り言のつもりで言った言葉に思わぬ返事がくる。

「大体寝る前に携帯いじるからってだけじゃね？」
「あ、確かに。」

久しぶりにKの死んだ時のこと思い出したなぁ。

Kが死んだ後、同期は自分の方が辛いはずなのに、本当に私のことを心配してくれた。
あまりの献身っぷりに周囲が驚くほどに。
同期曰く、その方が自分が沈まなくて済むから、とのことだったが、
やはりKの最後の言葉の責任を感じていたのだと思う。

周囲が付き合い始めたのかと疑る程、いつも二人でいた。
自分達自身もその点に関してはなんとも言えない状態であったが、しばらくして気付いた。
二人共Kを介して一緒にいるのだと。

『Kの事は忘れられないし、忘れたくない。
でも互いに今を生きていくべきだ。』

そうなんとか結論づけられたのが、卒業の時だった。
彼はそのまま研究室に残り科学の道を極め、私は就職し働き始めた。

「何ぼーっと考えてんの？」
「んー。。。先輩のこと？」

カワイイ事いいやがって、という照れ笑いと共にデコピンが飛んでくる。

「もう寝ようぜ。」

そう言ってパチンと電気を消す。
そして思い出したように付け加える。

「明日も晴れるといいなー、おやすみ。」

驚き過ぎて、思わず起き上がりそうになったのを、かろうじで押しとどめた。
いつも電話の最後にKが勝手な天気予報を言っていた事どころか、そもそもまだKの事さえ話していない。
偶然なのだろうか、それとも久々に思い出してくれたとKがいたずらでもしたのだろうか。
なんだかわからない、でも何かすごく心の奥が暖かくなるような気がした。

「きっと晴れるよ、おやすみ。」